

環境保全活動市民団体との見学・交流会

平成22年から、横断的なパートナー活動の推進を図るべく、センターの支援も得ながらパートナー企画部会として発足しました。活動としては、各種企画をプロジェクトとして立ち上げ、自主的に企画・運営をしています。

今回、そのプロジェクトの一環として環境保全活動市民団体の見学・交流会を企画しました。プロジェクトの趣旨は、パートナーの自己啓発（知識の習得・スキルアップ）を図り、それを活動に反映させ更なる活動の充実を図ることです。

10月21日（日）パートナーの参加者を募り、センターの支援を得て大子町のこどもエコクラブ（八溝自然たんけんたい）の「サシバのすめる里山づくり」活動をしている市民活動団体を訪ね、活動現場の見学及び意見交換会を行いました。

当日は、雲ひとつない快晴に恵まれ、真っ青な空と色づき始めた山の木々、久慈川の清流と八溝山系に囲まれたのどかな里山を空高く優雅に舞うトビの姿、この里山の環境は永遠に残したいと強く感じました。片道2時間の行程でしたが、長く感じなかったのは私だけではなかったでしょう。

今回訪ねた活動団体の代表は、センターのパートナーでもある宮田國敬さんです。

地元の子どもたち、父兄そして地元有志の皆さんの協力を得ながら活発な活動を展開しその活動成果は、茨城県はもとより各方面から高い評価を得て、数々の賞を受賞している素晴らしい活動団体です。

活動現場は、久慈川と押川の合流地点、たんぼのある山あいの里山で、アオサギやダイサギ、トビ、ノリス、ヨシキリなどが餌を求め飛びかう自然あふれた場所でした。

活動状況の説明を含め活動現場の案内は宮田さんにして頂いたのですが、あらためて環境維持の難しさを感じるとともに、環境保全における種々の課題を抱えながらも、宮田さんの地道で前向きな情熱溢れる取組み姿勢に感動しました。

残念ながら、この時期サシバは沖縄やフィリピン方面に渡っており確認はできませんでした。昨今、農薬を使わない有機農業をする人が少なく、そのため昆虫や餌となる生き物が減少し、鳥たちの住める環境が失われつつある危機的な状況であると感じました。宮田さんの人柄や地道な活動を評価し、農薬を使用しないで環境保全に協力してくれる農家の方もおり、ギリギリのところでも里山が維持されていることが救いでした。

後継者の問題もあるようですが、活動していた子どもたちが大学生になり活動現場に戻ってきているとのことで、嬉しく思いました。

見学・交流会を通し、宮田さんの穏やかながらも内に秘めた熱い思いが、我々にひしひしと伝わり、パートナー活動について、あらためて省みることができた意義ある交流会でした。来年以降も、市民団体との交流は継続して企画したいと思います。

今回、サシバは見られませんでしたでしたが機会があったら里山を舞う雄姿を見たいものです。

ちなみに、“サシバ”とは、里山に住むタカ的一种で4月中旬から5月上旬にかけて南から渡って来る「たんぼのある里山」をすみかとするタカだそうです。



サシバ里山活動現場



参加者のみなさん



交流会

（企画部会：尾形）

「サシバの住める里山づくり」の活動について

こどもエコクラブ（八溝自然たんけんたい）

この度、パートナー情報誌「香澄」に私たちの活動を紹介して頂く機会が得られましたので、ご紹介させていただきます。こどもエコクラブ（八溝自然たんけんたい）は、2002年4月に発足し、10年目を迎えました。現在、会員数は20名、スタッフ7名の27名で活動をしています。

会員は、大子町内の幼稚園、小学生、中学生の子ども達で自然体験学習を通して、将来、この地域の環境保全活動ができる人材を育成するために取り組んでおります。活動のテーマは、「サシバの住める里山づくり」、（サシバを守りながら、生きものたちと共存できる大子町に）です。

これまでの主な受賞歴

- ・平成18年7月：財団法人 日本生命財団賞
- ・平成20年11月：環境省「一村一品知恵の環づくり事業」奨励賞
- ・平成21年4月：環境保全茨城県民会議（ほう賞）子ども部門
- ・平成22年8月：ココ・コーラ環境教育優秀賞
- ・平成23年2月：茨城県こどもエコクラブ壁新聞コンテスト最優秀賞（全国大会出場）
- ・平成24年2月：茨城県こどもエコクラブ壁新聞コンテスト優秀賞



活動説明をする筆者

活動実績として

- ・八溝山・八溝川の生きものの調査の仕方を活かし、サシバの里山の 田んぼや周辺の生きもの調べを行い、かべ新聞にまとめて、地域団体の集会で発表できた。
- ・日本野鳥の会の探鳥会と合同で、サシバを観察し、子ども達のサシバについての学習など協力して頂いた。
- ・里山だよりの発行により、サシバの観察の仕方や田んぼの生きもの調べの仕方などをまとめ、会員に配布した。6月に親子で自然博物館でのサシバの研修をした。
- ・活動の記録として、「サシバの住める里山づくり」の冊子（第1・2集）2冊発行

活動の成果として

- ・サシバの里山に住む住民に、子ども達の活動がわかってきた。
- ・地域の人々に、環境に対する意識の変化が見られるようになってきた。
- ・地域・学校・こどもエコクラブ会員が協力して、サシバを守る活動ができるようになってきた。



サシバの里

今後の活動計画として

- ・里山周辺の自然環境、生きものたちの生態の変化を調べる。
- ・サシバフォーラムを開催し、サシバの里山づくりを町、県内外に広めてゆきたい。
- ・地域・学校・子ども会などと連携を図り、里山保全に取り組む。
- ・町内の里山でのサシバの生息調査。

こどもエコクラブ代表：宮田國敬（霞ヶ浦環境科学センターパートナー）

第2回パートナー霞ヶ浦講座 実施報告

第2回パートナー霞ヶ浦講座は9月29日に20名が参加されて、土浦市内にある上高津貝塚ふるさと歴史の広場と土浦市立博物館を見学しました。

霞ヶ浦は縄文海進と呼ばれる海面の上昇により谷に沿って海水が浸入し、現在の霞ヶ浦の輪郭が形成されたことは知られています。海であった頃の霞ヶ浦を知るうえで欠かせないのが上高津貝塚であります。そして土浦市立博物館は土浦城跡地にあり、土浦藩土屋家ゆかりの刀剣・茶道具など、そして「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」に関するものが多数展示されています。

1. 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

上高津貝塚には考古資料館、屋外に貝層断面展示施設、復元された竪穴住居や堀立柱建物などがあります。上高津貝塚は今から約3000～4000年前の縄文時代後期・晩期に作られた、関東地方でも有数の大規模貝塚であり、貝塚からは縄文人が食べた貝や魚、動物の骨のほか、土器や石器などの道具も見つかっています。また竪穴住居跡や塩をつくった大型の炉などが発見されています。大規模の貝塚がここにあったという事はおそらく貝を利用して何かを作っていたのではないかとされています。霞ヶ浦湖畔の各地からも貝塚が多数発見されていることから霞ヶ浦は縄文時代から生活の場として欠かせない所であったと思われる。

2. 土浦市立博物館

土浦市立博物館は平安時代の仏教施設の建物跡などの史料が保存されていますが、ここではやはり土浦城主であった土屋家に関わるものとして代々歴代藩主によって大切に守られてきた名刀が特筆される。総合展示コーナーには「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」をテーマとした「霞ヶ浦と古代・中世の土浦」、「城下町土浦」、「土浦の近代化と町のにぎわい」に関するものが展示されています。展示以外には土浦の歴史や文化をテーマにした講演会や、種々の体験講座の開催、小中学校の郊外学習の受け入れ、文化活動団体への協力等の取り組みを行っています。土浦を知る上でぜひ一度行かれてはいかがでしょうか。



上高津考古資料館内



復元された竪穴住居前



土浦市立博物館内

(企画部会：栗原)

「霞ヶ浦環境科学センター成果発表会」～霞ヶ浦は、今、どうなっているのか～

霞ヶ浦環境科学センターでは、霞ヶ浦の水質汚濁の原因を探るため、水質の調査や湖内の植物プランクトンなどの研究を進めています。今回の発表会では、島根大学の相崎名誉教授をお招きし「ゼオライトプロジェクト -江戸の資源循環の再生を目指して-」のテーマで基調講演をしていただくほか、当センターで実施している事業や研究の成果について発表を行います。

日時 平成24年12月19日(水) 13時30分～16時20分

場所 霞ヶ浦環境科学センター 多目的ホール

内容

- (1) 島根大学 相崎名誉教授 基調講演：「ゼオライトプロジェクト -江戸の資源循環の再生を目指して-」

【講演要旨】

ゼオライトはアンモニア態窒素やセシウムを取り込む能力がある鉱物です。

これまでの研究の結果、ゼオライトは、農業集落排水から窒素や有機物を除去し、さらに農作物等の肥料としても活用できることが判明しました。また、原発事故で汚染された土壌に用いることにより、作物へのセシウムの移行係数を下げることが分かっています。

- (2) センター事業成果発表：環境活動に係るセンター事業について、霞ヶ浦におけるアオコの発生状況について …など一般の方の事前申し込みは不要となっております。ご興味のある方は奮ってご参加頂ければ幸いですので、どうぞお気軽にお越しください。

(センター：櫻井)

私の細道（その2）

2. 採茶庵と臨川寺

芭蕉は、元禄の世では川向うの場末であったに違いない深川に居を構え、ここから、みちのくの旅に出立した。

私は、その旅の跡を辿る前に、芭蕉ゆかりの採茶庵と臨川寺を訪れたいと思っていた。同行の妻は、まず、江東区役所の観光課へ行く事を助言してくれた。ナビに区役所をセットし、10分程で目的地に着いた。丁度、昼休みではあったが、係の方は快く対応して下さった。「今日は、芭蕉出立の日で、10時から船で千住大橋まで旅立ちを体験するツアーがあったのですよ。」と、パンフレットを呉れた。パンフレットには、東日本震災の直後でもあった為、被災地へのメッセージを伝えるカードの紹介もされていた。江東区の観光地図を貰い、採茶庵と臨川寺への行き方も丁寧に教えて頂いた。

来た道に戻り、まず、採茶庵跡へ。仙台堀川沿いに採茶庵跡はあった。小さな吾妻屋の濡れ縁に芭蕉の像が川に向かって座っている。旅立ちの衣装であった。「お父さん、芭蕉さんの横に座りなさいよ。」と、家内は私と芭蕉のツーショットを撮ってくれた。

杉山杉風。蕉門10哲の1人で鯉屋市兵衛という幕府御用魚問屋。芭蕉が江戸で活動するに当たって経済的支援をした。芭蕉の最も信頼を置いた弟子の一人である。深川の草庵に居を構えた折にも尽力した。芭蕉がみちのくへの旅を決意し芭蕉庵を処分した後、旅立ちまでの住居として、杉風は自らの別荘を芭蕉に提供した。これが採茶庵である。

採茶庵に移った芭蕉が、元の住居に入った住人を垣根越しに見て詠んだ句から、奥の細道は始まる。そして、この採茶庵から芭蕉の旅は始まる。



草の戸も住み替わる代ぞ難の家 ばせを

清澄庭園の周りを通って、清洲橋通りに出ると、臨川寺がある。普通の民家と思える家屋に臨川寺の表札があった。表に面した狭庭に「芭蕉由緒の碑」と「墨直しの碑」がある。碑には、芭蕉と仏頂禅師の関係が記載されている。

仏頂については、奥の細道の「雲巖寺」のくだりにも出てくるが、この深川の地で、芭蕉の人生観に多大な影響を与えた人物である。仏頂は寛永19年（1642）に常陸国に生まれ、8歳から鹿島根本寺で禅門の道に入る。芭蕉より2歳年上である。諸国を旅した後、延宝2年（1674）に鹿島根本寺の住職となっている。鹿島根本寺は徳川家康から寄進された地であったが、この時期、鹿島神宮にこの地を取り上げられていた。これを不服とした仏頂は、老中と寺社奉行に返還を訴え出た。この訴訟の為の江戸出府の際の宿泊所が深川大工町の臨川庵であった。芭蕉庵から万年橋を渡って約300メートルのところであった。芭蕉が深川に移った時には仏頂は既に臨川庵に仮住まいしていた。ここで二人は出会い、芭蕉は禅師仏頂に心酔したという。この後、芭蕉の句に「侘」の詩情が投影されていく。

天和2年（1682）、仏頂は鹿島根本寺の件に勝訴する。同時に、鹿島根本寺の住職を辞し、臨川庵に閑居する。その後、鹿島根本寺の境内の長興庵に隠居するが、貞享4年（1687）芭蕉は曾良、宗波と共に鹿島を旅し、仏頂と再会している。詳細は芭蕉の「鹿島紀行」に記されている。

その後の元禄8年（1695）仏頂は臨川庵を寺にすべく幕府に願い出て、18年後に臨濟宗臨川寺の山号寺号が許可された。



(パートナー：小松)

南イタリア・シチリア島旅行（2）

夕方、ナポリ港からフェリーに乗り込みシチリア島の州都パレルモまで移動した。キャビンはベッドにトイレ、シャワーも備えてあった。夕食はバイキング方式なので好きなものだけ食べればいいので助かる。寝る前に、明日からのシチリア島観光にそなえ体力回復のためカプリ島で買った小瓶のリモンチェッロ（アルコール 33 度、レモンの皮をアルコールにつけて砂糖加えたりキュール）を飲んだ。甘ったるくて薬くさく美味しくないが疲れた体を癒すには十分なアルコールだ。

波も静かで陸地のようにぐっすり眠れた。朝、目を覚ますとパレルモ港にはいつていた。230 数年前にゲートルはこの海路を帆船に乗って船酔いに悩まされ、嵐におののきながら 5 日かけて到着したそうだ。



—シチリア島—

シチリア島は海底から隆起した石灰岩質の島（九州の面積の 7 割くらい）で、この島に 500 万人（イタリアの人口のほぼ 10%）の人が住んでいると聞きその多さに驚いた。石灰質の地盤で肥沃な火山灰の土壤に覆われて、塩野七生の「ローマ人の物語」によると、この地はローマ時代の穀倉地帯でローマ人の胃袋を満たす大変重要な地域だったようで、現在もレモン（イタリア生産の 90%）、オレンジ（70%）、アーモンド（50%）や小麦の主産地となっている。地中海の真ん中に位置し、昔、海上交通の要衝地のため様々な民族が覇権を争い複雑な歴史を刻んできた。

紀元前には海洋国家のフェニキア人、少し遅れギリシャ人の入植、紀元前から紀元後にかけてローマ人、その後、ビザンティン、アラブ、ノルマン人——と異民族の支配が目まぐるしく変わり、異質な文化を混濁し独特の文化を育んできた島だ。

—シチリア島・州都パレルモ—

パレルモはアラブ・ノルマン時代の遺跡が大変多く残されている。この都市が歴史の舞台に登場するのは 9 世紀頃で、アラブ人のシチリア島支配によって州都をシラクーサからここに移してからだ。アラブ人の寛容な宗教政策のもと、農業（灌漑等の農業技術やレモン、サトウキビ等のさまざまな農作物をもたらした）や地中海貿易等で栄え、その後、ノルマン人（祖先は北欧のバイキングで当時傭兵として活躍）による異民族（アラブ人やギリシャ人）への宥和政策

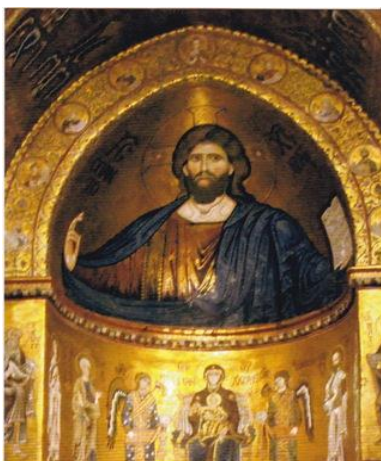


パレルモの大聖堂

で、12 世紀頃にはヨーロッパ大陸への経済・文化の発信地として全盛時代を迎えた。

この辺境の地が一時期にヨーロッパ大陸の先進地になったのは、地中海の地理的条件もさることながらアラブ、ノルマン時代の寛容な宗教政策や異民族への宥和政策による平和政策が大きな要因の 1 つだろうと思う。町を歩いていると、3 つの文化（イスラム・ビザンティン・カトリック文化）の入り混じった建物などをあちらこちらで散見できた。赤い丸い屋根を載せたアラブ風のカトリック教会、昔、モスクであった大聖堂、アラブ時代の王宮にノルマン時代の建物を継ぎ足した王宮（現在はシチリア州議会堂）、それにカトリック教会の内部にビザンティン時代のモザイク画等など。

それにしてもここはモザイク画が多い町だ。パレルモ近くのモンレアー



モンレアーレ大聖堂のモザイク画

レ大聖堂（12 世紀建設）でそれを見学した。中に入ると、正面に全知全能神の神キリスト、左右壁面に旧・新約聖書の物語のモザイク画がまばゆいほど金色に輝いていた。その多さはイタリア最大で、ノルマン王がモザイク職人をビザンティン帝国からわざわざ招いてつくらせたそうだ。その当時の王国の豊かさや王の権力を後世の人に示威している。

—シチリア島・アグリジェント—

パレルモからバスで内陸部を通り南海岸へ移動した。内陸部は果樹・穀倉・放牧地帯で農家少なく人の気配は殆どなかった。シチリア島には古代ギリシャ時代の遺跡が大変多く、アグリジェントもその1つである。バスから降りるとアフリカにも近いいためか暑さもさらに厳しく、この日は風も強く、熱風と砂埃の中、「神殿の谷」と呼ばれる古代ギリシャ神殿群(神殿様式は最も古いドーリア式)が集中している地区を歩いた。周囲にはアーモンドの木が生い茂っているが、影を作るような大きな木はなく休むのに適した場所もなかった。

多くの神殿は、古代カルタゴ軍の攻撃や大地震で破壊された。最も大きいゼウス神殿は未完のうちに破壊され、石材の山になっていた。その石材は港をつくるための材料として運び去られ、石柱や石板が風にさらされ無残に転がっていた。



コンコルディア神殿



ヘラ神殿

神殿の遺跡より石置き場の感がした。

比較的保存状態のよい神殿はコンコルディア神殿（BC 5 世紀頃建設）である。ここの神殿は凝灰岩でできていて、目が粗いため黄褐色の漆喰が塗られていて鮮やかな茶色の色合いをした神殿であった。古代ギリシャ神殿といえば白い大理石や石灰岩の白っぽいイメージを持っていたため少し不自然に思った。暑い中、全員無事に見学を終わって、次の目的地、ギリシャ人の植民都市として最も栄えたシチリア州東海岸へ向かって出発した。

（パートナー：平江）

「パートナー情報誌 香澄」原稿募集

香澄編集部会では「香澄」に掲載する原稿を常時募集しています。内容は問いません。センターでの活動の様子や、趣味その他なんでも結構です。写真も大歓迎です。原稿はパートナー室のメールボックスに投函していただくか、編集委員に直接お渡しください。

（パートナー情報誌「香澄」編集部会）

【編集後記】9 月中旬、ガレージの平屋根に太陽光発電パネルを設置した。8 枚×3 列、計 24 枚で、発電能力は最大 5.4 kW/H。東電さんの「いじわる」で実際に売電を開始したのは 10 月 5 日なので 1 か月間の正確な実績は集計できないが、推定でその損得なりを開陳したい。売電額は約 16,000 円、買電額は 5,000 円。設置前の電力料金は約 10,000 円だったので、21,000 円の経済的効果ということになる。さて支払の方は、ローン期間 13 年（80 歳までの年齢制限で 13 年が最長）で月額 26,000 円。差引 5,000 円の持出し。1 kW/H、42 円の優遇買取制度は 10 年で終了するから、11 年目から 3 年間は月 10,000 円の持出し。14 年目からようやく数千円の小遣いを手にするようになる。そのとき当方は 84 歳。とても元気で生きているとは思えない。いやいや二酸化炭素の排出量はそれなりに減らしているから、社会的効果で自己満足。(H)